

影響を与えた人や体験

嵩の父・柳瀬清は、1892 年(明治 25)の 11 月に現在の高知県香美市香北町に産まれた。兄は寛で、2 歳年下の嵩の弟・千尋を養子として迎えた。また、嵩は母の再婚に伴い、伯父の寛の家に引き取られることになった。

寛・清はともに学校の成績が良く、名門の高知県立第一中学校に進学した。

その後、寛は京都府立医学専門学校(現 京都府立医科大学)に進み、医師となり御免町に開業した。清は東亜同文書院で学んだ。この東亜同文書院は中国の上海にある日本の高等教育機関だった。私学であったが、広くアジアで活躍する人材を養成することを目的としていて、政府も出資していた。学費や生活費は府や県が負担し、日本の全国から優秀な学生が集まった。全寮制で、中国語の習得のみならず、大陸調査旅行など独特の学習環境が整えられていた。清も県費で学んだ。

父の清は、東亜同文書院を卒業して、日本郵船の上海支店で 2 年間勤めた後、講談社に移り雑誌の編集に従事した。その後、東京朝日新聞の記者となった。中国語の堪能だったので「支那部」に配属され、1922 年(大正 11)には広東特派員として、単身赴任した。

当時、中国では孫文の国民党が共産党との連携を模索し、国共合作に向けて情勢が大きく動いていた時期であった。そんな状況の中、清は旺盛に取材を実施して日本に原稿を送った。それらは「柳瀬清」の署名入りで、数多く新聞に掲載されている。

ところが、赴任後、1 年半に病を得て帰らぬ人となった。母・登喜子 30 歳、嵩 5 歳、千尋 3 歳だった。

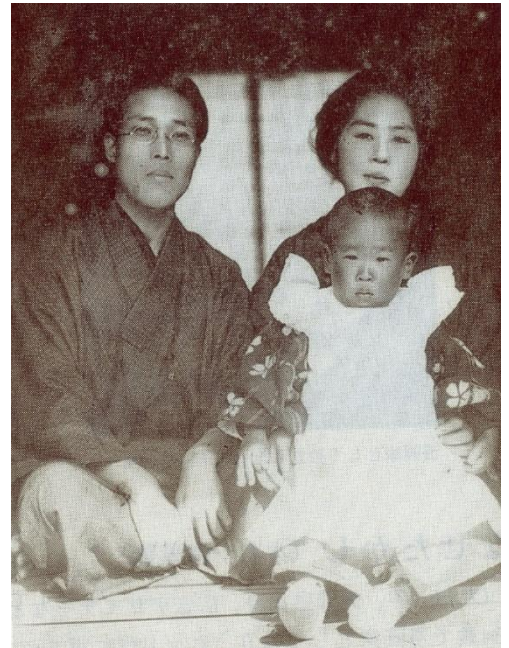
「**東亜の存立と日中の親善は双生の関係だ**」は、東京朝日新聞時代の父・清が書いた文章だった。このモチーフを利用して、宣撫班では紙芝居を作成して中国人に好評だった。隣国・隣人との友好の大切さに気付くきっかけとなった。

立派な上官、ダメな上官として、著書『ぼくは戦争は大きらい』で、やなせは師団長と参謀の行いを例として挙げている。リーダーの良し悪しで大きな影響を受けるのは、今も昔も同じだ。命のやり取りをする戦場において、上に立つ人の判断は生死を分けた。翻って、無謀な戦争に突き進み、また終戦の判断が遅れ無駄な戦死者を増大させた当時の政府・軍部のリーダーたちの無能力さにはあきれるばかりだ。こんな国が、勝てるわけはなかったのだった。

お粥で戦争はできないは、「腹が減っては戦はできぬ」をやなせが表現した言葉だ。これは、上海までの行軍の途中や、上海での対米軍との決戦に備えて食糧を温存するために、極限の飢餓状態を体験したものの言葉だった。後日、アンパンマンのストーリーで、腹が減った人に自分の頭をちぎって与えるシーンが出てくるが、それは「食べることの大切さと、ひもじい時の悲しさ」を知っているやなせらしい表現だった。

逆転する正義は、東亜の新秩序を打ち立てる聖戦が、侵略戦争だったことに気づいたことから導き出されたものだった。やなせは、「戦争はしたくないがしかたがない。平和と正義のためにたたかうのだ」と思っていたが、「聖戦」はたんなる標榜だったことに気づいたのだった。

ひっくり返らない正義については、「おなかですいている人に、食べ物を分けること」と看過した。戦争は人を殺すことだが、食べ物を分けることは人を生かすことだとの思いは、後の長い歳月に渡り、やなせの作品作りや生活のバックボーンとなった。



嵩 1 歳の頃の、父、母との写真。
東京の自宅にて